

ゴールドデンウィーク、機上から見えた不況

みなさんは今年のゴールドデンウィークをどのように過ごされたのだろうか。金持ちであれ貧乏であれ、希望を持ち、将来が見えなくても農業の生産者として経営者であれば、この期間に休みを取ることは難しい。私もこの世に生を受け51年間に休みを取った記憶はないし、家族旅行など無縁と思っていたが、この4月は天気が続き、作業が順調に進んだので急遽家族旅行に出かけた。旅行中に感じたことだが、世の中やはり不景気ようだ。5月4日朝札幌の丘珠飛行場から4人乗り小型機を操縦して、津軽海峡を渡り2時間のフライトをオペレーション・ノーマル(すべて順調)で秋田飛行場に着陸。その後の着陸事務手続きのため空港事務所に向かい、担当女性事務官と話をした。彼女の話によると昨年までは連休中に個人機(個人所有の飛行機)が10機程度やって来て、スポット(駐機場)の奪い合いになることもあったそうだが、今年私たちが最初で最後の飛行機だそう。実は丘珠の飛行クラブでもこの連休中に飛行の予約を入れた者は2名しかいなかった。空を飛ぶことが豊かさの基準ではないと思うが、

昨年までは多くのクラブ員はガンガン飛んで、今年は全く飛ばない様を見ると、とてもさみしい思いがする。1万2000円の給付金、そして15兆円の補正予算、その中の1兆5000億円の農水予算はどの様に使われるのだろうか。政府は頑張って予算付けをしたのだから国民もその期待に添うのが本当だろう。こんなやさしい政府の気持を分らない「日本人の魂」を理解できない非農業者がアグラをかき、また生産者を指導しているところと勘違いしている者達がすぐ身近に存在するのかもしれない。秋田空港から庄内空港到着後、住宅地区と田んぼが隔離され、補助金をたっぷり使い基盤整備された庄内平野を後にして、翌日は山形空港からは5万8000円を支払い、羽田を乗り継いで家族が先に待っている釧路で合流した。旅行先の観光バスも4人で貸切状態、JRも1車両全く使っていないかった。家族の旅行話してもつまらないので、やはり「ヒール話」をしよう。

農業生産者であり続けること

Vol.16



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを耕作する。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

今年の冬に米国に行き、現地の飛行クラブを事前に予約してあったので、LA近郊を2日間、200馬力のパイパー機で飛びまわった。その飛行クラブがあるロングビーチでは、9人乗りのビジネスジェットが金髪おねえちゃんのアテンダントとともに飛び立つ姿を見ると、日本との違いをまざまざと見た。その後、成金のビバリーヒルズや

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

資産家の住むローリングヒルズ、新興のワイナリーのフレンチバレーを眺めると、やはり米国の豊かさを実感することができるが、LAから1時間くらい離れた場所ではアミーゴ達(メキシカン)が野菜畑でモクモクと働いている姿を上空から見ると、世の中、平等なんぞ存在しないと、産まれた時点で半分、運命が決まっていると思うこともある。しかし、考え方を換えればその**半分の運命を変えるチャンス**は残されていることを忘れてはいけません。今の米国には貧乏人は貧乏人の仕事、金持ちには金持ちの仕事があり、そのポジションには見えない、いや、きつと見える壁が存在している。もしこれから米国に進出しようとする生産者がいるとしたら、やはり1世代は捨てる覚悟がなければいけない。このことは日本でも同じ環境であることはみなさんもご存じのはずだ。ではなぜ戦後、魅力ある米国に農業移民が存在しなかったのだらうか。まともに営農出来る能力を持った生産者なんて日本国内には存在しなかったのが、本当の理由だろう。

豊かな国は農業も豊かである。10人中9人はカナダの方が米国よりもなんとなく良いと考えるが、それは大間違いだ。人口、国家予算も米国の10分の1ということは農業予算も10分の1しかない。小学生でもわかるこの事実を、日本では誰も教えないし、左翼生産者は学ぼうとしない。まして一部の左翼メディアは米国を目の敵にして、相対的に他のコケージアン(白人国)を持ち上げる様は異常だ。またこの様なメディアを支持する**「日本かぶれ野郎」**は農業への新規参入を良しとしているが、完全に農業をナメきつていないか? 釣り名人は漁業をすぐできるのであるらうか、掘っ立て小屋作り名人は林業に参入することは容易か? 板金屋が車メーカーになれるのか? ふざけるな! と言いたい。

ただでさえマトモな生産者が少ないのに、これ以上効率の悪い産業にして、誰の利益につながるのだ。確かに補助金漬けの大豆・小麦生産者を蔑む風潮はいろいろな場面で出くわす。しかし補助金なしの農業は国策に沿った正しい農業経営と断言できるのか。職業選択の自由は日本国憲法22条で保障されている。農政に逆らうのは自由だが、「公共の福祉に反しない限り」という一定の制約があるのである。

和郷園の木内さんがコラムで以前に書かれたように、自分ひとりで生きていくわけではない。道路や電話だって税金、言い換えれば補助金施策の賜物の一つである。

ついでに「隣人を選ぶことはできない」とよく言われるが、自分の周りには貧乏農家は存在してほしくないものである。この貧困とバカは豚を起因とする新型インフルエンザよりも強烈に感染力が強い。この病気は10mくらい離れて、目が合っただけで感染するのでマスクをしても無駄で、ブランドがあるSPF豚と同じ略字のSPF(遮光性)が高いUVカットのサンングラスが必要である。

補助金を頂戴して おりますが、何か?

さて、今回の強行ツアーで、あの日本一の地主であった**本間家**を訪れる機会があった。庄内空港の地図を見るとその北には何と酒田市があるではないか、日頃から「地主だ、小作だ」と発言しているので、是非ともこの日本を代表する旧地主様を知るために出かけることになった。物の本でそこそこの話を知っていたが、やはりすごい家系だった。

ただ250年間で30000町を買ったと言えは聞こえは良いが、早い話、本業の金貸し業で返せなかった貸金の担保である農地を引受け、新しい小作人に貸し、小作料を徴収したのが正しいと感じた。事実、戦後GHQの命令で農地のほとんどを取られたと言うことは、本間家では実農として農業をしていなかったことになり、これは未来永劫続くと思つた日本式封建社会からの脱皮が出来なかったことは痛恨の極みだったので、説明では山林9000町歩と宅地は没収の憂き目にあわなかったもので、戦後は不動産業を営んでいくそう。

効率を考えた場合、農産物の生産は金貸し、流通、販売よりも落ち、歴史の過程において商業が発展するが、一度、農業生産者がこの生産という軸足を動かし、他の産業にのめり込むと元には戻れない。

ものを作る大切さ、誰がなんと言つても農産物は農業生産者以外が作れない事実にはプライドを持つべきだ。効率の悪い産業ではあるが、食を無視できない国策の中で農産物の評価してただけの閣議、両院を通過した補助金と言う予算付けがあつても何ら**矛盾はない**。

我々は戦後、「アメリカ民主主義」を学んだ。この制度は正しいと思うことを選挙で決めて少数意見を無視して、過半数を超える意見を実行するものである。改めて言うが、正しいことを決めるのでない、正しいと思うことを決めることであると学んだ。その是非は将来、歴史のみが証明することになるのだらう。